

Nic Cheeseman,

*Democracy in Africa:
Successes, Failures, and the
Struggle for Political Reform.*

New York: Cambridge University Press,
2015, xx + 247pp.

つば 良 まちこ
粒 良 麻知子

本書は、サハラ以南アフリカ諸国の独立後から現在までの民主主義の変遷を一冊にまとめたものである。著者のニック・チーズマンは最近までオックスフォード大学アフリカ研究センター長や国際的なアフリカ研究の学術誌 *African Affairs* の共同編集長を務めており、欧米のアフリカ政治研究の中心的な研究者である。

著者は本書で、民主主義がうまく機能していないアフリカの国を数多く紹介しつつも、「アフリカで民主主義をあきらめるのはまだ早すぎる」という一文で本書を締めくくっているとおり、アフリカの民主主義に対して肯定的なスタンスをとっている。そして、アフリカでは、欧米の民主主義を真似るのではなく、各国の文脈に沿った民主的な政治制度を探り入れていく方が、民主主義が持続すると主張する。

本書は序章の後、第1～6章でアフリカの民主主義の変遷を説明し、終章で今後の展望を論じている。全章を通じて事例中心に議論が展開されているのは、著者がアフリカ各国の文脈を重視している証である。一方、本書の末尾にアフリカ諸国の民主主義に関するさまざまな指標の一覧も所収されており、アフリカの民主主義の全体像と各国の特徴を捉えるのに便利である。本書は1980年代末から90年代にかけてアフリカ諸国が経験した民主化とその後の変化に注目してきた研究者にとって、アフリカにおける民主主義の最近の状況と議論を整理し、今後の民主主義のあり方を考える上での一助となるだろう。

序章ではまずアフリカの指導者に焦点をあて、彼らがどのような条件で民主化のための改革を選択す

るのが論じられる。第1章は「民主化の断片」と題し、1960年代の独立後に非民主的な政治制度を採ったアフリカの指導者が、政権を正当化するため、市民の政治参加を限定的に認めてきたことから、権威主義的なアフリカの指導者にとっても民主主義が有益な参照点であったことを指摘する。第2章は「抵抗の文化」と題し、1970～80年代のアフリカにおけるクライエントリズムの広がりや市民社会の変遷を明らかにし、「第2の自由化」と題する第3章では、1980年代末から90年代のアフリカ諸国の民主化を4類型に分けて論じている。第4章は「選挙を輸出する」と題し、国際社会のアフリカの民主主義への影響を述べ、「民主主義を転覆させる」と題する第5章は、複数政党制選挙を導入した後、暴力や紛争が発生した国々が紹介される。ただし、著者は民主化後のすべての暴力や紛争が複数政党制選挙によるわけではなく、それ以前にも原因があった点に注意を促す。第6章は「民主主義の分け前」と題し、民主主義が権威主義よりもより良い公共サービスを提供し、国民のニーズに応えているかを探っている。

アフリカ政治研究者にとって最も示唆に富んでいると思われるのは終章である。終章は第6章までの議論をふまえ、アフリカにおいてさまざまな民族や宗教間の信頼関係を築くような民主主義をいかに設計するかを論じている。著者はアレンド・レイプハルトの多極共存型民主主義を引用し、近年のケニアやジンバブウェの連立政権を分析しながら、アフリカで民主主義を定着させるためには、競争と包摂の均衡を保つことが重要であると主張する。そして、国ごとに異なるこの均衡点を見つけるためには各国の深い知識が必要であるという。各国の文脈を重視せよという結論は新しくないが、競争と包摂という相反する政治的方向性の均衡をいかにして保つかという指摘はもっともであり、アフリカの民主主義の課題は最終的にこの問いに行きつくようにさえ思われる。今後のアフリカ政治研究がこの均衡点の解明に貢献していくことを期待する。

(アジア経済研究所地域研究センター)